

氏名	お ぜき あや こ 小 関 彩 子
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 116 号
学位授与の日付	平成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目	ベルクソン哲学における自我論の二義性の問題

論文調査委員 (主査) 教授 小川 侃 教授 有福孝岳 助教授 佐藤義之

論 文 内 容 の 要 旨

人間存在の「行為の自由」はいかにして確保されるのか。これが本論文を貫く問題意識である。この問題を明らかにするために本論文の取った道は「何がわれわれ人間をして行為を為さしめるのか」を問うのではなく、「そのような行為を為した、そのわれわれとはいかなる者であるのか」を徹底的に問いなおすことであった。つまり人間の行為の原因を人間の外部に求めるのではなく、行為を遂行した人間の在り方を解明することが問題の焦点である。近代科学の優勢下では、自由が物理学的なあるいは心理学的な決定論によって不可能になると見たベルクソンにとって、人間の自由行為の救出は、大問題であった。本論文は、その意味で、ベルクソンの自由行為論を自己自身の自我に立ち還って行為を考察するという観点から検討し、自由行為の構造の解明を試みた。基本的にいって、ベルクソンは行為が真に自我に由来していれば、それは自由行為であると定義する。

ベルクソン哲学の性格付けを巡っては、従来様々な批判・解釈・議論が交わされてきた。自由は実践の問題か認識の問題か、あるいは二元論の形而上学か一元論の形而上学か、様々な座標軸をめぐって評価が分かれてきた。このような分裂を誘発する要因が、ベルクソンの自我論がはらむ矛盾・錯綜にあるということ、申請者は発見し、指摘した。ベルクソンは自我に関して「内的自我」と「外的自我」という二つの「アスペ(aspects)」を区別している。しかし、問題はこの「アスペ(aspect)」という用語にある。

ベルクソンが、この語を二つの異なった意味において使用しているということを解明した申請者は、彼が、この語の持つ多義性を自身では意識せず、混同したままにしていることを指摘した。申請者はこれらの「アスペ(aspects)」を、「様相」と「局面」という二つの概念に分類・整理すべきであると考えて、本論文を貫く自身のテーゼにしている。

「様相」とは自我に対する二つの異なったとらえ方を意味する。それゆえ内的、あるいは外的自我という二つの「アスペ(aspects)」は唯一の存在する自我をとらえるための方法であると考えられる。まずこの「様相」説に基づいて、われわれの自由な行為を創造するものは、唯一の自我であるとベルクソンは考えていると解釈し、内的様相という方法によるならばこれを理解することが出来ると考えた。次に、これに対して自由ではない行動について考察した。自由な行為が自我のみから創出されるのだとすれば、当然の帰結として自由ならざる行動は自我ではないものに帰されるべきだと考えられる。ここでは行動をベルクソンのテキストに基づいて解明し、行動が自我を排除した身体と物質の世界を場として生起するということを論証した。

この第一の解釈を採用した場合、われわれは常に自由なのであり、問われているのは「自由をいかにして認識するか」、「われわれの行為がいかなるものであるのか」という問題であったと言える。この解釈に従うと、自我は自由ではあるが唯精神のみに立脚して身体＝物質世界との関係を失い、行為を創造することができなくなる。

他方「局面」とは、二つの「アスペ(aspects)」の区別が識別される自我のほうに適用されると考えられる場合である。この解釈に立つと、自我は二つの部分に分割されることとなり、したがって内的、あるいは外的な二つの自我が並立すると

解釈せざるを得ない。この第二の解釈によると、自由ではない行動の主体を外的自我に、自由な行為の主体を内的自我に置くことが出来る。ここでは、行動は単に身体のみ位置づけられるのではなく、自我の一部分との関わりを有することになる。

この場合、問いは、「われわれはいかにして自由に行為すべきなのか」と定式化することが出来る。ここでは、自我はあるいは自由な、またあるいは自由ならざる行為を生むことになる。しかしながら、依然として「真の」自我は行為とは対極的な平面に位置し、真に自由な行為を具現化することは不可能になってしまう。この二局面の間を統合することがついにできないために、内的自我・外的自我・身体・物質世界のどこまでを人格に含めるのかが曖昧なままに放置されざるをえない。

また、自我の深奥を探る試みは、そのまま自我の始源へ、未だ個我の未分化な生の流れそのものへと開かれて行くこととなる。しかしながら、生の根源性の称揚は、必然的に個性との間に相剋をもたらさずにはおかない。「様相」説の場合、人格から身体を含む全体性という性格が失われ、生の永遠に通底してはいるが、それゆえにかえって人格の個性が消失してしまう。反対に「局面」説を採ると自己と他者の境界線が不確定となり、その場の論述の文脈によってある時は自己が非常に狭い精神の内に閉じこもり、またある時は「大文字の自我」と「大文字の身体」の内に溶解してしまうこととなる。

本論文は、これらの錯綜を解明することによって、ベルクソン理解の基本的な枠組みを提示してその解釈に新しい可能性を開き、ひいてはわれわれの「生」のありようをより根本的に解明する試みである。

論文審査の結果の要旨

19世紀末から20世紀の前半においてフランスを代表する哲学者、アンリ・ベルクソンが、彼の最初の優れた書物、『意識に直接与えられたものについての試論』（英訳も邦訳も『時間と自由』）において、意識の本質を「持続」として捉え、この持続をもとにして人間の自由行為という古来の問題の解明にささげたことはよく知られている。本博士学位申請論文は、ベルクソンのこのような問題意識に導かれながらベルクソンの主要4著作のみならずその他の著作をも吟味し直し、基本的には「われわれがいかにして行為を選択し実行しているのか」という極めて体系的な問いによってベルクソン哲学を全面的に問い直している。

本論文は、つぎのような画期的でオリジナルな際立った特徴をもつ。1) ベルクソンが述べる自我の在り方をベルクソンを超えてベルクソン以上に問い詰めていること。2) 自我の「アスペ (aspect)」の概念が「様相」と「局面」という自我の概念の二つの在り方の〈あいだ〉を動揺していることを指摘し、動揺の根拠を解明したこと。3) 自我の「様相」と「局面」の構造つまり差異性と同一性の解明の成果を根本的なテーゼとして、ベルクソン哲学が全体として呈示している矛盾した姿の構造を露呈したこと。4) ベルクソンの哲学の呈示する「二元論か一元論か」、「实在論か唯心論か」などというさまざまな問題と矛盾点をその全体に互つて様々な観点から解明したことである。

要するに、本論文はベルクソンの自我の二義性をとりわけ自我の「アスペ (aspect)」の二義性の解明に焦点を絞って自我行為が示す「自由」の構造の顕在化と、それを基にしてベルクソン哲学全体の構造の解明を試みたものといえる。付け加えると、このような自我のアスペクト概念の二義性による解明は、西田幾多郎以来のわが国におけるベルクソン哲学の受容の歴史において本論文をもって嚆矢とする。

本論文は、全部で序論と4章から成立している。第1章は、自我の二つの様相の解明に当てられ、自我の二つの捉え方の区別が明かにされた。ここでは、同じ一つの自我が異なった二つの仕方で見られる。第2章では、身体と物質が主題的に扱われた。ベルクソンは、脳も身体も物質と考えており、ベルクソンの知覚・行動の理論は、ほとんど脳や神経系などの物質の動きによって説明されることになる。第3章では、自我の二つの局面が自我のいわば実在的な区別として主題的に顕在化された。自我の外的な局面と自我の内的な局面として、自我は二つの局面をもつ。このとき、簡単に言えば、二つの自我が実在的に区別され、二つの自我が存在する。第4章では、自我が自我を超えたものに開かれているという次元が明かにされた。

人間の自由をめぐる遂行された本論文は、ベルクソン哲学にみられる〈人間存在を生命宇宙の一元論に吸収させる〉という方向に大きな批判と懐疑の刃を向けており、結論としては、ベルクソン哲学における人格の実存と、人間の自由の開く、他者と交換不可能な唯一無比の実存性格を明晰に顕在化した。この点は、人間存在のうちの最も進化した存在者とみなされ

ている神秘家においても、個人の自我は、神に吸収されていないともベルクソンは考えているという申請者の鋭い内在的な批判に明瞭に示される。これは、ベルクソン哲学に対するこれまで良く見られた通念としての「生の哲学者」という偏見を打ち破るものであり、まったく新たな視圏を開いたものとして高く評価できる。

自我と自由の問題をめぐるベルクソンの思想全体の哲学的で体系的な再分析は、本論文で徹底的になされたと言言できる。自我にかかわるベルクソンの思想の内在的理解から出発して、最終的には〈ベルクソン哲学の体系全体〉をぎりぎりの線まで問い詰めて、自我を超えたものをも問題とするという意味でも本論文は成功を収めている。通念として「生の哲学者」とされるベルクソンに対して「私の生」のみならず、「私の死」や「私の生の始源」にまで及ぶ説明がなされており、このような独自の視点からの説明は、ベルクソンの哲学の研究の範囲内ではこれまで十分になされていなかった。そのなかで、申請者は、ベルクソン哲学の徹底的な再構成を試み、これまで十分に説明されてこなかったベルクソンの哲学の大きな矛盾と対決し、新しい解釈の提案をしているのみならず、それを超えて、人間存在の在り方を自由行為に焦点をあてて徹底的に解明した。

また本学位申請論文は、人間存在と環境世界との関わりを明かにする研究を目指して創設された人間環境学専攻、自然・人間共生基礎論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成13年1月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。